

『源氏物語』における「人目」

——視線を気にする男性主人公のありかた——

頼 則 若 奈

はじめに

『源氏物語』の中にはたびたび「世語り」という言葉が使われている。意味は、「世間の語り草」「世間話」「世間の取沙汰」とされる。^①この世語りについて小峯和明氏は、「世語り」が男女の関係と関わっていること、物語の中心となる登場人物は常に「世語り」される立場にあることを指摘されている。なぜなら『源氏物語』に登場する「世の人」は「口さがなき」「もの言ひさがなき」存在であり、光源氏をはじめとした主要登場人物たちに関する少し珍しくて好奇なうわさを常に求めているからである。^④そのため彼らは、隠されて

いるような秘密を容赦なくつわさしていく「口さがな」世間の中で、秘密が露見することがないように、つわさされることのないように、考えをめぐらしている。

それでは、つわさされることを気にする登場人物たちは、どのようにして物語の中で行動しているのだろうか。一つに、他者からの視線を意識する描写がある。特に男性登場人物は自ら行動する立場にあることから、秘密の露見を防ぐために周囲の視線、いわゆる「人目」を常に気にかけていた。したがって本稿では、『源氏物語』の中でも光源氏・夕霧・柏木・薫・匂宮といった男性登場人物の描写に使用される「人目」を取り上げる。他者の目を気にする登場人物たちの意識のありかたを確認し、同じ「人目」の語であっても登場人物ごと

に特徴があることを考察したい。

一、正編における「人目」

光源氏・夕霧・柏木

まずは、『源氏物語』における「人目」の用例数を以下に挙げる。

●『源氏物語』

【総数…七十四例】 用例数の多い順

- ・光源氏…十七例
- ・薫…十例
- ・匂宮…六例
- ・柏木…五例
- ・夕霧…五例（一例：光源氏の行動に対して）
- ・中の君…三例
- ・髭黒大将…三例
- ・女三宮…二例（柏木の評判に対して／源氏の行動に対して）
- ・桐壺帝…二例

- ・中納言の君（朧月夜つぎの女房）…二例
- ・一例：明石の君、浮舟、宇治の人々、大君、大宮（葵上の母）、雲居雁、左大臣（葵上の父）、玉鬘、なま孫王・四位の老人、弁の尼、麗景殿の女御、六条の御息所
- ・周囲に人がいないことを示すのみ…七例

【男女比】

- ・男性…五十例
- ・女性…十六例（うち二例は相手（男性）の行動を見て）
- ・宇治の人々（男女）…一例

用例数より、「人目」を気にするのは男性であるといえる。理由として行動範囲の広さと、それに伴う「人目」にさらされる機会の多さがある。例えば男女の関係など、登場人物が秘密にしているものを見える、あるいは気づくことによつて、周囲に伝播される可能性が高く、「世語り」つまりはうわさの中心人物となりやすい男性は、周囲の視線を気にしなければならぬ状況に常に身を置いていた。

なかでも『源氏物語』において、「人目」の用例数が最も多いのは光源氏である。複数の女性と関係をもち、秘密を抱

えることが多かった彼は、行動する際に常に「人目」を気にしていたといえる。また時には惟光に密かな恋の取り持ちをさせるなど、「人目」に晒されることのないように注意を払っていた。

一方で、「人目」を憚り行動をしないというわけではなかった。例えば次にあげる場面では、「人目」を気にして空蟬との逢瀬を思い悩む姿が描かれている。

軽々しく這ひまぎれ立ち寄りたまはむも、人目しげからむ所に便なきふるまひやあらはれむ、人のためいとほしくと思しわづらふ。(帚木巻(一)一〇九頁)

空蟬の寝所へ忍び込んだ光源氏は再び会うことを望むが、傍線部のように空蟬がいる紀伊守邸は「人目」が多い場所であるため、見つかつては不都合だと思案にくれる。一見すると、「人目」を憚っているようにも見られるが、この本文の後に、源氏は空蟬の弟・小君の手引きのもと再び空蟬のもとへと忍び込んでいく。

渡殿の戸口に寄りゐたまへり、いとかたじけなしと思ひて、「例ならぬ人はべりてえ近うも寄りはず、
「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましうから

うこそあべけれ」とのたまへば、「などてか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなん」と聞こゆ。さもなびかしたつき気色にこそはあらめ。童なれど、物の心ばへ、人の気色見つべくしづまれるを、と思すなりけり。

(空蟬巻(一)一二三頁)

小君が「例ならぬ人(＝軒端菰)はべりてえ近うも寄りはず」と光源氏に言つが、光源氏は引き下がらない。しかしこの行動により、光源氏は空蟬ではなく軒端菰と契ることになり、さらに立ち去るところを年寄りの女房に見咎められてしまう。幸いにもこの女房は小君の連れを民部のおもとと勘違いしたために、光源氏だと知られることはなかったが、「なほかかる歩きは軽々しく危かりけりと、いよいよ思し懲りぬべし」と、光源氏にとって危うい経験の一つとなった。

また夕顔との関係においても、「人目を思して隔ておきたまふ夜な夜などは、いと忍びがたく苦しきまで思へたまへ」と「人目」を憚って出向かないようにするのだが、一方で「なほ誰となくて二条院に迎へてん」と相反する感情を抱いている。最終的に光源氏は夕顔を近くの廃院へと連れ去ってしまう。「人目」を気にするそぶりを見せながら、結局は

憚ることが出来ずに行動してしまつのである。

末摘花に逢つたため常陸宮邸を訪れる際は、「人目しなき所なれば、心やすく入りたまふ」と、「人目」を気にする様子もない。そもそも末摘花の父・常陸宮は亡くなっており、彼女は荒れた邸できちんとした乳母もなく暮らしているため、気にするよつな「人目」もないのだが、ここにおいても自らの欲に従つて積極的に行動していく光源氏の様子がうかがえる。このように光源氏は、女性と密会する際「人目」を常に気にしているが、「人目」を憚り行動をしないというわけではないことが分かる。それは、朧月夜との密会でも同様であった。以下の場面は、五壇の御修法の折、弘徽殿の細殿に忍び込む光源氏の様子が描かれている。

かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。朝夕に見たてまつる人だに飽かぬ御さまなれば（賢木巻（二）一〇五頁）

内裏は五壇の御修法の最中ということもあり、普段よりも「人目もしげき」時期である。そのため「常よりも端近」の所で逢わなければならない状況に、光源氏は誰かに見られて

いるように感じて恐怖を抱く。その夜、あわただしく帰る光源氏の姿を、朱雀帝の承香殿女御の兄・藤少将が見ていた。この藤少将は右大臣方の人間だけに、光源氏を見たことが世間に流布したら非難されることは確実である。ここでは知らないうちに「人目」に見られてしまつ危険性が見てとれる。しかし、光源氏は藤少将に見られたことを知らない。その後も朧月夜との交際は続けられ、遂に事件は起きる。次に引用する場面では、逢瀬の帰り、雷雨により右大臣邸の中で人々が騒いでいたため、立ち往生する光源氏の状況が描かれている。

大臣はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、雷いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎで、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて近う集ひまゐるに、いとわりなく出でたまはん方なくて、明けてはてぬ。御帳のめぐりにも、人々しげく並みあれば、いと胸つぶらはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心をまどはず。（賢木巻（二）一四四頁）

最終的に光源氏は娘の様子を見に来た父・右大臣に見つか

り、二人の逢瀬は露見する。この右大臣は「思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性」なので、さっそく弘徽殿女御に告げ口をする。このことをきっかけとして、光源氏は須磨へと退去することになる。

このように須磨退去前の光源氏は、「人目」を憚りながらも「つつむ」、つまりは「人目」から隠れようという意識は低いように思われる。しかし須磨退去から都に戻ってきた光源氏は、「人目」に対する対抗策を身につけていた。それは、「人目」を「飾る」ことである。以下は、薫の産養における光源氏の行動を抜き出したものである。

大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老いらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」とうつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、(柏木巻

(四) 三〇〇 三〇二頁)

女三宮と柏木の不義の子・薫が誕生した際、光源氏は「あな口惜しや、思ひまする方なくて見たてまつらましかば、め

づらしくうれしからまし」と、複雑な心境を抱えていた。「思ひまする方なくて」は、子供の誕生にうれしく思いつつも、その子供が実子でないだけに、手放して喜ぶことができない光源氏の心情を表している。しかし、世間から見ると薫の父親は光源氏であるため、周囲にいる女房たちに複雑な心境を気取られないように、光源氏は「人目」を「飾る」のである。

つづいて、玉鬘が実の娘であると知った頭中将と、彼女を實の娘のように六条院へ迎えて養育していた光源氏が、玉鬘の対応に関して会話する場面を取り上げる。

いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべければ、ひき結びたまふほど、え忍びたまはぬ気色なり。主の大臣、「今宵はいにしへさまのことはかけはべらねば、何のあやめも分かせたまふまじくなむ。

心知らぬ人目を飾りて、なほ世の常の作法に」と聞こえたまふ。「げに、さらに聞こえさせやるべき方はべらすなむ」。(行幸巻(三) 三一六 三一七頁)

裳着の腰結役に際して、頭中将は扇に隠された実の娘を見たいと思うが、祝いの場なので行動を慎む。光源氏も、多く

の人がやって来る中で、自分は玉鬘の正体を一切話さないの
で頭中将も同じように振る舞ってほしいとお願ひする。「心
知らぬ人目」、つまりは玉鬘が頭中将の娘であると知らない
人々に気取られないよう、偽装するのである。このときに、
「人目を飾」という言葉が使用されている。

「人目」の対応で、「飾る」という言葉が用いられる人物は
『源氏物語』において光源氏のみである。さらに、「人目」の
使用例がある『源氏物語』以降成立の『夜の寝覚』『狭衣物
語』⁵としかへばや物語』には「人目」を「飾る」という言
葉は使われない。「人目」を「飾る」方法は、光源氏のみ
の行動であるといえよう。

この「飾る」の意味は、「偽る」という意味合いが強い。
「人目」を「飾る」という表現は、『源氏物語』以前にもみら
れないが、『竹取物語』には「言の葉をかざれる」という表
現があり、「言葉を偽る」意味に使われている。その用例を
次にあげる。

……かくや姫、暮るるままに思ひわびつる心地、笑ひさ
かえて、翁を呼びとりていふやう、「まこと蓬萊の木か
とこそ思ひつれ。かくありさましきそらことにてありけ

れば、はや返したまへ」といへば、翁答ふ、「さだかに
作らせたる物と聞きつれば、返さむこと、いとやすし」
と、うなづきをり。

かくや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見つけば言の葉をかざれる玉の枝
にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ。(『竹取物語』三五頁)

右記は、くらしもちの皇子が蓬萊の玉の枝を持ってきたが、
偽物であると露見する場面にあたる。かくや姫はこの枝を作っ
た工匠から話を聞いて偽物だと分かるやいなや、翁に「そら
ごと」であつたことを伝える。さらにくらしもちの皇子に、傍
線部にあるとおり、本物ではなく言の葉で飾り立てられた偽
りの玉の枝であつたと歌を返す。この偽りの玉の枝というこ
とを表現する際に、「飾る」という言葉が用いられているの
である。この『竹取物語』の用例をふまえると、光源氏にお
ける「人目を飾る」という表現は、「人目」に対して「偽る」
という意味が強いと考えられる。人からどのように見られるか
を気にする光源氏は、周囲の「人目」を欺いているのである。⁶
しかしながら、この「人目」を「飾る」光源氏を見破った

人物がいた。それは夕霧である。伊藤博氏は、「野分巻」より夕霧の視点人物的行動が見られるとし、「光源氏の世界に對して、ある反乱的座標をすら抱え込んだ存在が設定され、物語は、その視点から照射した情景を含み込んで来る」と述べられている⁷⁾。また高橋亨氏は、夕霧は「物語の表現構造において視点人物」であり、「物語世界内の主体的な行為者であるよりも、視つづけることを性格として引きつけている」「認識者」であるとされている⁸⁾。伊藤氏、高橋氏の指摘より、「源氏物語」において、夕霧は視点人物的役割を担っていることが分かる。

野分巻の玉鬘垣間見においては多少の心の揺れが見られるが、若菜上巻で柏木とともに女三宮を垣間見した際、夕霧は状況を冷静に見つめている。前者では、世間では親子であるはずの玉鬘と光源氏の関係に気が付き、後者では女三宮に魅入られる柏木に気が付いている。こうした視点人物の役割を担う夕霧の視線は、光源氏に対しても發揮されていた。

以下に引用したのは、女三宮に対して「人目を飾」ついている光源氏の姿を夕霧が見破っている場面である。

かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世な

りけれ、(中略) なほかくさまさまに集ひたまへるありさまものとりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、とりわきたる御けしきにもあらず、人目の飾りばかりにこそと見たてまつり知る。わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつるをりありなむやとゆかしく思ひきこえたまひけり。(若菜卷上(四)一三四一三五頁)

朱雀院の大切な娘である女三宮を引き取りながらも、彼女の幼稚さに落胆した源氏は、世間的に取り繕った愛情を彼女にそそぐ。女三宮のもとへ足を運んでも、思い出されるのは紫の上のことばかりであった。光源氏は後に、

かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、内々の心ざし引く方よりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、(若菜卷下(四)一五四頁)

と女三宮への待遇の重さを語っているが、そうした周囲の目を偽る源氏の姿を、夕霧はいち早く見破っていたのである。その理由として、上田満寿美氏は夕霧と光源氏の親子関係の希薄さを指摘されている。そのため夕霧は、親子でありなが

らも他者の視線で父である光源氏を視ているのである。さらに上田氏は、夕霧を「肉親であるが故に光源氏の周囲に最も近づける人物であり、その内面に踏み込むことの出来る人物」とも論じられている。夕霧が観察力に優れた人物であることは先述したが、ただ見ているだけではなく、光源氏と他者との構造を、夕霧だけが見破っているのである。

またこうした夕霧の観察力は、一方で自分自身が「人目」に見破られないための欺く力として、遺憾なく発揮される。柏木の死後、夕霧は落葉の宮への恋慕から、「人目」を取り纏わなければならない状況ができる。そこで夕霧は、自分が他者からどのように見られているかを冷静に判断し、利用していく。次にあげる場面では、亡くなった友人・柏木に代わり、ひとり残された落葉の宮を手に入れるために画策する夕霧の様子が描かれている。

まめ人の名をとりにてさかしがりたまふ大将、この一条宮の御ありさまをなほあらまほしと心にとどめて、おほかたの人目には昔を忘れぬ用意に見せつつ、いとねむむろにとぶらひきこえたまふ。下の心には、かくてはやむまじくなむ月日にそへて思ひまさりたまひける。御息所

も、あはれにありがたき御心ばへにもあるかなと、今はいよいよものさびしき御つれづれを、絶えず訪れたまふに慰めたまふことも多かり。(夕霧巻(四)三九五頁)

夕霧は、世間から「まめ人」と評価され、分別があると思われている。さらに落葉の宮は、友人であった故柏木に、自分の死後の世話を依頼された女性である。夕霧は世間の手前、亡き柏木の友人という立場を装って、懇切に世話をする。落葉の宮の母・一条御息所は、夕霧の下心に気付くことなく、彼の行動を誠意として受け止めて喜ぶ。けれども夕霧は次第に恋心を抑えきれず、病に臥せた一条御息所を見舞った折に落葉の宮の元へと近づき、胸中を訴えるのだが、その前にまず、女房たちに落葉の宮に対する恋心を話していることは着目すべき点である。

「かう参り来馴れつけたまはることの、年ごろといふばかりになりけるを、こよなうもの遠うもてなさせたまへる恨めしさなむ。かかる御簾の前にて、人づての御消息などの、ほのかに聞こえ伝ふることよ。まだこそならはね。いかに古めかしきさまに、人々ほほ笑みたまふらんとはしたなくな。齡つもらず軽らかなりしほどに、

ほの好きたる方に面馴れなましかば、かううひうひしうもおぼえざらまし。さらに、かばかりすすくしうおれて年経る人は、たくひあらじかし」とのたまふ。

げにいと侮りにくげなるさましたまへれば、さればよと(夕霧巻(四)四〇〇頁)

夕霧は奥に控えている落葉の宮の前に、近くにいる少将の君などの女房たちに自身の胸中をほのめかしたうえで、さらに御簾の外から人伝てでしか落葉の宮と交流が出来ない現状への不満を訴える。話を聞いた女房は、「さればよ」と夕霧の恋心に気付き、夕霧の言うとおりに、落葉の宮へ返事をするようにうながす。女房たちは将来の生活の安定のために、落葉の宮の気持ちは二の次にして、夕霧を新しい夫にしようとするのである。この場面において夕霧は、本来ならば関係を持つ際の、わずらわしい「人目」になるような女房たちを真っ先に味方につけるのである。

引用した場面の後に夕霧は落葉の宮の簾中に侵入するのだが、密通事件があつた柏木と女三宮とは違い、結果として落葉の宮との間に密通は起こっていない。にもかかわらず、まるで二人の間には関係があるかのように世間に知られ、やが

て事実へとすり替わっていく。そのきつかけは、一条御息所の加持を行う律師が、御息所に自身が目撃した内容を話したことであつた。

律師はまず「そよや。この大將は、いつよりここには参り通ひたまふぞ」と一条御息所に問いかけ、その理由として落葉の宮の部屋から男が出てくるところを見たと言ひ、伴僧たちも、その男は夕霧であると断定していたことを証言する。律師は夕霧と落葉の宮の關係の内実を知らないため、「参り通ひたまふ」という言葉は憶測にすぎない。しかしながら、律師の証言によつて、一条御息所は二人の關係を誤認する。さらに落葉の宮の女房・少少將に律師の話の眞実を尋ねた一条御息所は、夕霧の落葉の宮への恋心や、侵入事件の翌日に夕霧から届いた手紙のことなどを聞き、より一層律師の話を信じ込んでしまふ。

ほどなくして一条御息所は心労による病状の悪化で亡くなるのだが、その以前に夕霧へと贈つた手紙を夕霧は利用する。一条御息所の死後、世間にも夕霧と落葉の宮の關係がうわさされるようになり、そのうわさを知つた夕霧は、

なほかくおぼつかなく思しわびて、また渡りたまへり。

御息など過ぐしてのどやかにと思ししづめけれど、さまざまもえ忍びたまはず、今はこの御なき名の、何かはあながちにもつつまむ、ただ世づきて、つひの思ひかなふべきにこそは、と思したちにけり。北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひきこえたまはず。正身は強う思し離るとも、かの一夜ばかりの御恨み文をとらへどころにかこちて、えしもすぎはてたまはじと頼もしかりけり。
(夕霧巻(四) 四四七頁)

と、一条御息所から届いた手紙を証拠にうわさを利用しよう
と考える。

さりとしてかくのみやは、人の聞き漏らさむこともことわり、とはしたなう、「この人目もおぼえたまへば、
「内々の御心づかひは、このたまふさまにかなひても、
しばしは情ばまむ。世づかめありさまの、いとつたてあり、またかかりとてひき絶え参らずは、人の御名いかがはいとほしかるべき。ひとへにものを思して、幼げなるこそいとほしけれ」など、この人を責めたまへば、げにとも思ひ、見たてまつるも今は心苦しう、かたじけなうおぼゆるさまなれば、人通はしたまふ塗籠の北の口より

入れたてまつりてけり。いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人をも、げにかかる世の人の心なれば、これよしまさる目をも見せつべかりけりと、頼もしき人もなくなりはてたまひぬる御身をかへすがへす悲しう思す。

(夕霧巻(四) 四四七 四七八頁)

夕霧は、落葉の宮や少少将が一条の宮の人々や大和守の目を気にしていることを理解している。少少将にそうした世間体への不安というものを指摘しつつ、宮と夫婦関係を持たなくとも、世間のうわさを巧みに利用し、人目だけは夫婦らしく振る舞うことを口実に、落葉の宮の元へと入り込もうとするのである。その結果、少少将は「げに」と思い、夕霧を手引きしてしまつのである。

このうわさによって、落葉の宮にとつて味方であつた少少将は、落葉の宮を裏切ることとなる。夕霧はまた後に、うわさを聞きつけた花散里にも一条御息所からの手紙の内容を持ち出し、「亡からむ後の後見」としてお願いされたのだと言いくるめようとしていた。やがて世間は、二人には関係があるものとしてうわさを広めていく。落葉の宮はうわさを耳にした朱雀院に見放され、女房や大和守には説得され、誰一人

味方がいなくなり、夕霧と一緒にしか行き場がなくなつてしまふ。

改めて述べるが、夕霧と落葉の宮の間には何も起こっていない。事実無根の関係である。しかしながら夕霧はわずらわしい「人目」になるような女房たち、目撃者、手紙を利用することで、嘘を真実に塗りかえていった。光源氏と他者との構造を見破っていた夕霧であるが、それだけではなく、一方で自身をとりまく環境に関しては「人目」を巧みに利用し、欺くことに長けている人物といえるのではないだろうか。

以上、光源氏と夕霧の「人目」を確認していくことで、「偽る」源氏と「見破る」夕霧の関係性が浮かび上がった。さらに夕霧は「人目」を「見破る」だけではなく利用するという、狡猾な人物として描かれているのである。

つづいて、柏木における「人目」を取り上げる。柏木は、女三宮に魅了され、密通を犯してしまい、源氏に知られたことで死に追いやられていく人物である。柏木は、当初より光源氏の「目」を気にしていた。以下は、父内大臣の使いで玉鬘の元を訪れた柏木と玉鬘のやりとりである。

「なにがしを選ひて奉りたまへるは、人つてならぬ御消

息にこそはべらぬ。かくもの遠くては、いかが聞こえさすべからむ。みづからこそ数にもはべらねど、絶えぬたとひもはべなるは。(中略)「なやましくも思さるらむ御几帳のもとをば、ゆるさせたまふまじくや。よしよし、げに、聞こえさするも心地なかりけり」とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ、用意など人には劣りたまはず、いとめやすし。「参りたまはむほどの案内、くはしきさまもえ聞かぬを、内々にのたまはむなんよからむ。何ごとも人目に憚りてえ参り来ず、聞こえぬことをなむ、なかなかいぶせく思したる」など、語りきこえたまふついでに、「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづ方につけても、あはれをば御覧し過ぐすべくやはありけると、いよいよ恨めしさも添ひはべるかな。まづは今宵などの御もてなしよ。北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくも思しめさめ、下仕などやうの人々とだにうち語らばばや。またかかるとはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」とうち傾きつつ、恨みつづけたるもをかしければ(藤袴巻
(三) 三三九 三四一頁)

柏木は、玉鬘出仕に表立って手出しができないこと、光源氏の「人目」を遠慮して玉鬘に会いに行けないことを実の父・内大臣が嘆いていると玉鬘に伝える。父の伝言を玉鬘に届けているだけではあるが、そのあとで自身の想いも「いでや……」と語っており、この周囲の目、とくに光源氏の「人目」に遠慮して玉鬘に会えないという嘆きは、内大臣だけではなく柏木自身の気持ちであるといえよう。光源氏の「人目」に対する警戒心というのは、柏木自身も感じていた。

その後、玉鬘は髭黒大将の北の方となり、二人の関係は進展せず終わる。一方で柏木は、六条院で蹴鞠が催された際に、朱雀院の娘であり光源氏の妻である女三宮を垣間見たことで、彼女に魅せられ恋心を抱く。代わりとして女三宮の姉である落葉の宮を妻に迎えたが、「人目に咎めらるまじきさまにばかりもてな」だけで、女三宮への執着を断ち切るこゝろができなかった。けれども女三宮は源氏の妻であるため、柏木は「人目」を気にしつつ、女三宮に会う機会をうかがっていくのである。そして、紫の上が病気のため、光源氏をはじめ大勢が二条院に移り、六条院は人が少なくなっていた好機に、小侍従に手引きを相談する。この小侍従は「もの深か

らぬ若人」だったので、柏木の熱心な訴えに、「もし、さるべき隙あらばたばかりはべらむ」と答えてしまふ。その後も小侍従に手引きを迫る柏木に困り果てた小侍従は、女三宮の周囲に人がいない機会に柏木を手引きし、密通がなされてしまふのである。

この密通後、柏木の気にする「人目」は、より「光源氏の目」に限定されていく。光源氏が女三宮へ送った柏木の手紙を見つけたと、小侍従が柏木に告げたのである。

かの人も、いみじけにのみ言ひわたれども、小侍従も、わづらはしく思ひ嘆きて、「かかることなむありし」と告げてければ、いとあさましく、いつのほどにさること出で来けむ、かかることは、あり終れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとつつましく、空に目つきたるやうにおほえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことも見たまひてけむ、恥づかしくかたじけなく、かたはらいたきに、(中略)年ごろ、まめ事にもあだ事にも召しまつはし、参り馴れるものを、人よりはこまやかに思しとどめたる御気色のあはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに

心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見あはせたとまつらむ、さりとして、かき絶えほのめき参らざらむも人目あやしく、かの御心にも思しあはせむこのいみじさ、などやすからず思ふに、心地もいとなやましくて、内裏へも参らず。さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心もいとつらくおぼゆ。(若菜巻下(四)二五八頁)

柏木は玉鬘に接触しているときから「光源氏の目」を気にしていた。女三宮との密通直後も、「この院に目を側めたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ」と光源氏に見られたらとおののき、小侍従から話を聞いた時は、引用文傍線部にあるように、光源氏に知られる前でさえ天空から見張られているのではと思うほど怯えていたのに、実際に光源氏に知られたと思うと、柏木は光源氏に顔向けすることもできないと身がすくむ思いでいる。しかし、柏木は光源氏から目を掛けられており、常に催し事に呼ばれる存在である。このままだこへも参上しないというのも、周囲にも不審に思われ、何より光源氏に対して自らの罪を裏付けているように

ものである。しかしながら幻影の「光源氏の目」に怯える柏木は、内裏にも参上しなくなる。

密通後、当初は幻影的な光源氏の「人目」におびえていた柏木であったが、とうとう試楽の日に参上する。そこで実際に源氏の目に留められることによって、恐怖心は頂点へと達する。当該本文を掲出する。傍線部は光源氏の、二重傍線部は柏木の様子である。

例の、け近き御簾の内に入れたまひて、母屋の御簾おるしておはします。げに、いといたく瘦せ瘦せに青みて、例も、誇りかにはなやぎたる方は、弟の君たちにはもて消たれて、いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、いとどしづめてさぶらひたまふさま、などかは皇女たちの御傍にさし並べたらむにさらに咎あるまじきを、ただ事のさまの、誰も誰も、いと思ひやりなきこそいと罪ゆるしがたけれ、など御目とまれど、さりげなく、いとなつかしく、「そのこととなくて、対面もいと久しくなりにけり。(若菜巻下(四)二七四 二七五頁)

主の院、「過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、い

と心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」とてうち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことに心地もいとなやましければ、いみじきことも目もとまらぬ心地する人をしも、さし分きて空酔ひをしつつのたまふ、戯れのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはずを御覧し咎めて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくてもわづらふさま、なべての人に似ずをかし。(若菜巻下(四)二八〇頁)

柏木と女三宮の關係を知っている光源氏は、上達部が来る前、柏木と二人で対峙しているときも、やって来た上達部らと盃を交わす際にも、終始、柏木に視線を注ぐ。全く光源氏を見ることが出来ない柏木に、自分の酔った姿を柏木が見て笑っているなどと反対のことを指摘して、光源氏は痛烈な皮肉を柏木に浴びせる。回ってきた盃もまともには交わすことができない柏木を、光源氏はまた見とがめて飲むことを強いる。光源氏は柏木に対して言外に「見ている」ことを強調するものである。

玉鬘に接触したときから、柏木は光源氏を意識していた。女三宮との密通後も、常に「光源氏の目」に怯え続けている。そして実際の「光源氏の目」に見られてしまったいま、柏木に残された道は、自らの死であった。死を前にした柏木は女三宮への文に「咎めきこえさせたまはむ人目をも、今は心やすく思しなりて、かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」と書きつける。光源氏の視線に怯え続けた柏木だからこそ、自身の死後は、光源氏の「人目」に怯えなくてもいいと記すのである。

この光源氏の「人目」によって源氏を取り巻く六条院周辺から排除される柏木について、排除という点から論じた三谷邦明氏の論文をあげる。¹⁰⁾三谷氏は「目をそむける」「目を合わせない」ことは、民俗学的に、古代において共同体からの排除を意味していたと指摘する。「源氏物語」の初め、桐壺巻でも、

朝夕の宮仕につけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすあはれなるものと思ほして、人の譏りをもえ憚させたまはず、世の例にも

なりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。(桐壺巻(一)一七頁)

と桐壺更衣に対する帝の寵愛を、傍線部にあるとおり目をそむけることで排除しようとしている。しかし柏木の場合、光源氏に見られるという、少しずれた形で彼をとりまく共同体から排除されている。

柏木はもともと、高田祐彦氏が論じられているように、身分意識が強かった。柏木は源氏と自分を常に比べ、その身分を強く意識する。そうした柏木の様相に対して今井久代氏は、柏木にとって中心人物である光源氏に敵視されることは、自らの存在意義が抹消されることを意味していると指摘する。¹⁷⁾身分意識を強く持つ柏木にとって、「都を形づくる」源氏に外敵扱いされることは、「都」からの排除を意味しているのである。そのため柏木は自らの死という形で排除される。この排除の方法が古代においては他者の視線から背けられることであり、桐壺巻でも桐壺更衣は他者から目を背けられることで、排除されていた。

しかしながら柏木においては、「人目」＝光源氏に見られ

ることが排除につながっている。そうした従来とはずらされた視線の使われ方に、柏木における「人目」の特殊性があると思われる。

一、続編における「人目」 薫・匂宮

二では、続編における「人目」を取り上げる。まず薫における「人目」を確認する。薫の「人目」に対する意識のありかたは、中の君との関係において見て取ることができる。宇治の八の宮の娘・大君が亡くなり、中の君は匂宮の妻となっている。薫はその中の君に、亡き大君への執着心を向ける。以下は、中の君への執着心に対して「人目」を気にしていく薫の様子である。

声なども、わざと似たまへりとおぼえざりしかど、あやしきまでただそれとのおおほゆるに、人目見苦しがるまじくは、簾も引き上げてさし対ひきこえまほしく、うちなやみたまへらん容貌ゆかしくおぼえたまふも、なほ世の中にも思はぬ人は、えあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られたまふ。(宿木巻(五)三九三 三九四頁)

後にも引用するが、薫の場合は「人目」に対して「見苦し」という言葉が接続している。「見苦し」い自身の姿を世間に見せたくないために「人目」を非常に気にしなければならぬ、という心情が表れていると思われる。また次の場面でも、「人目のあいなきを思へば」という、周囲の人々が見た通りに動きたいという薫の考えが表れている。

近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、すずろなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞとも参り寄らめ、疎からず聞こえかはしたまふ御仲らひなめれば、さるやうこそはあらめと思ふに、かたはらいたければ、知らず顔にてやをら退きぬるぞ、いとほしきや。男君は、いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなどもいとづめがたかりぬべかめれど、昔だにありがたかりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり。かやうの筋は、こまかにも、えなんまねびつづけざりける。かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出でたまひぬ。(宿木巻

(五) 四二八 四二九頁)

中の君は東宮候補・匂宮の妻であり、薫の立場はあくまで

「後見人」である。女房たちの手前、薫は求められた役割を果たすことしかできずに悩むこととなる。その後も中の君との交流は続いていくのだが、中の君に対する執着は増すばかりであった。そもそも後見人としての立場があるため、中の君の元を訪れることには「人目」を気にする必要がある。しかしながら、中の君とのやりとりには「人目」という言葉が頻出する。それは、中の君への執着を隠さなければならぬという意識の強さに比例していると考えられる。

さらに以下に引用した場面では、薫は中の君を宇治へ連れて行くことと考えるのだが、それもすぐ不可能だと切り捨てている。

宇治にいと渡らまほしげに思いためるを、さもや渡しきこえてましなど思へど、まさに、宮は、ゆるしたまひてんや、さりとて、忍びて、はた、いと便なからむ、いかさまにしてかは、人目見苦しからで、思ふ心のゆくべき、と心もあくがれてながめ臥したまへり。(宿木巻 (五) 四三〇頁)

(五) 四三〇頁)

薫の中には、匂宮や中の君付きの女房たち、さらには世間の「人目」が常につきまとうのである。中の君が男子を出産

した際も、薫は後見人という立場から、周囲の「人目」にことごとしく「見られないような品々を贈る。中の君とのやりとりにおいて「人目」が頻出する理由に、こうした薫の役割に縛られる傾向というものが関わってくると思われる。

一方、浮舟との関係については浮舟失踪前には「人目」の用例が見られず、失踪後に三例登場するというのも、「人目」を気にしなければならぬ状況に置かれているか、いないかの違いであると考えられる。このように薫は「人目」を非常に気にして、「人目」から求められた役割に縛られてしまい、「人目」によって行動を制限されてしまう人物といえる。

では、匂宮はどうであろうか。匂宮が「人目」を気にし始めるのは、浮舟の存在を知ってからである。薫は「人目」に「見苦し」くないようにと思っているため、それ以上の行動に移さない。対照的に匂宮は「人目も思されぬ」という、周囲の目を気にしてられない心情から始まっている。

出でたまはんことのとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出でて、この御使を西面にて問へば、申しつぎつる人も寄り来て、「中務宮参らせたまひぬ。

大夫はただ今なん。参りつる道に、御車引き出づる見は

べりつ」と申せば、げにはかに時々なやみたまふをりをりもあるをと思すに、人の思すらんこともはしたなくなりて、いみじう恨み契りおきて出でたまひぬ。(東屋

巻(六) 六五 六六頁)

右に掲出した本文において、浮舟を中の君の元へと託し、その場を去る薫の姿を偶然見かけた匂宮は、中の君の元にいる浮舟を見つけることとなる。匂宮はいつもの好色心から浮舟に言い寄るのだが、乳母に見咎められ、また匂宮の弟・中務宮から中宮の体調が芳しくないという伝言を聞かされたために浮舟の元から出ていく。この時に匂宮は「人目も思されぬ」気持ちになっていた。

この「人目」を我慢できない匂宮の姿は、後にもたびたび見受けられる。以下は、浮舟を連れ出そうと考える匂宮である。

参りて、さなむとまねびきこゆれば、げに、いかならむと思しやるに、「ところせき身こそわびしけれ。軽らかなるほどの殿上人などにてしばしあらばや。いかがすべき。かうつつむべき人目も、え憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はんとすらん。さるべきほどとはいひなが

ら、あやしきまで昔より睦ましき中に、かかる心の隔ての知られたらむとき、恥づかしう、また、いかにぞや、世のたとひにいふこともあれば、待ち遠なるわが怠りをも知らず、恨みられたまはむをさへなむ思ふ。夢にも人にも知られたまふまじきさまにて、ここならぬ所に率て離れたてまつらむ」とぞのたまふ。今日さへかくて籠りゐたまふべきならねば、出でたまひなむとするにも、袖の中にぞとどめたまひつらむかし。(浮舟巻(六)一三五頁)

「人目」に「見苦し」くないよう、「紛らはし」たり「ことさらにし」なかつたりする薫とは違い、匂宮は「人目」を「憚」ってはいられないのである。匂宮はここで、「かかる心の隔ての知られたらむとき、恥づかしう」と薫の「人目」を気にしている。しかしその悩んだ末に出した結論は「二重傍線部にあるように」「ここならぬ所に率て離れたてまつらむ」であった。薫が中の君を宇治へ連れ出したいと考えていた時は希望を示す「まし」であったのに対し、匂宮は浮舟連れ去りに対して意思を示す「む」が使われている。薫は希望を述べただけで実行に移そうとは思っていないのに対して、匂宮は

浮舟を連れ去る決意を抱いて言葉を終えている。

もちろん、中の君と浮舟の待遇の差はあるが、ここから「人目」に縛られたまま行動に移せない薫と、「人目」によつて縛られている現状を打開していこうとする匂宮の違いが見出せる。そして結果的に、匂宮は浮舟を連れ去る行動をとる。

夜のほどにてたち歸りたまはんも、なかなかなべければ、この人目もいとつつましさに、時方にたばかりせたまひて、川よりをちなる人の家に率ておはせむと構へたりければ、先立てて遣はしたりける、夜更くるほどに参れり。「いとよく用意してさぶらふ」と申さす。こはいかにしたまふことにかと、右近もいと心あわたたしければ、寝おびれて起きたる心地もわななかれて、あやし、童への雪遊びしたるけはひのやうにぞ、震ひあがりける。「いかでか」なども言ひあへさせたまはず、かき抱きて出でたまひぬ。右近はこの後見にとどまりて、侍従をぞ奉る。(浮舟巻(六)一五〇頁)

浮舟の周囲にある「人目」を「つつまし」と感じていた匂宮は、供人・時方に手伝わせ、また浮舟側の女房である右近や侍従をも巻き込んで、対岸の邸に浮舟を連れ去ってしまう。

そこは匂宮が望んだ「人目も絶え」た場所であった。

二日間、浮舟と過ごした匂宮は、帰京後に病み臥すこととなる。その間、宇治では薫の指示のもと浮舟を京へ移す準備が整えられていくのだが、匂宮はその情報も手に入れることが可能であった。薫の家司・仲信の娘が大内記の妻であったため、その繋がりから匂宮へ情報が流れているのである。匂宮は隠れ家を用意し、先んじて浮舟を手に入れる案を立てる。

順調に行動する匂宮であったが、このすぐ後に薫に匂宮と浮舟の関係が露見してしまう。その原因は匂宮の隨身による失敗と、匂宮自身の油断であった。匂宮の使者が宇治へ手紙を受け取りに来た際、薫側の隨身と鉢合わせてしまうのである。薫の隨身に問い詰められた匂宮の使者は話を取り繕うのだが、頭の働く隨身に不審がられ「匂宮の使者が不審な動きをしている」と薫へ伝えられる。そのことを知らない匂宮の使者は大内記に手紙を渡し、その手紙は六条院にいる匂宮へと手渡される。

しかしその六条院には明石中宮の不調により薫はもちろんのこと、宮たち・上達部も参上していた。つまりそこは「人目」の多い場所である。「人目」を避けようと台盤所の戸口

まで出たとしても、その場で手紙を開いた匂宮は、結果薫に「側目で見通」されてしまう。ここに、匂宮の「人目」に対する油断が表れていると考えられる。

匂宮にとって「人目」を警戒しなければならない場面は浮舟と会う時のみである。さらにここは六条院であり、匂宮からすると「内」であった。そこまで警戒する必要もないと考えたのだろう。しかしその「人目」に対する警戒心の薄さが要因の一つとなり、隨身からの報告と照らし合わせた薫は、匂宮と浮舟の関係に気が付くのである。

浮舟をめぐる薫と匂宮の動向は対照的であった。薫は絶えず「人目」をはばかり、「人目」を避けるように行動し、「人目」が求める姿を演じている。そのため薫自身の欲求とは相反して、彼は「人目」に行動を制限され続けることとなる。

一方、匂宮は「人目」に対する警戒心が低く、「人目」に抗おうとしている。こうした匂宮の性質の理由として三沢享子氏は、明石中宮といった匂宮の周囲にいる人たちは、後見の必要性から匂宮の女性関係に対してさほど必要以上の干渉をしないと指摘する。¹³⁾こうした「人目」をさほど気にしなくてもいい環境で育った匂宮だからこそ、浮舟を手に入りたい

と感じた時に、薫や周囲にいる人々など、今まで気にしていなかった「人目」がひどく煩わしいものとなっていくのである。

また両者が「人目」を憚っているのは、薫の場合は大君死後の中の君との関係において、匂宮は浮舟との関係においてである。薫の場合は中の君を宇治へ連れて行くことと考えても、すぐさま「人目」があるから不可能だと否定し、希望のままにとどまる。しかし匂宮の場合は、浮舟の周囲にある「人目」を煩わしいと感じると、「人目」のない場所へと一時連れ去ってしまう。匂宮にとって「人目」は、薫のように拘束力をもったものではないのである。

しかしその警戒心の低さから、浮舟からの手紙を薫に見られてしまい、薫に浮舟との関係も気付かれてしまう。「人目」に対する匂宮のありかたからは、「まめ」の薫と「すき」の匂宮という二面を分担して引き受ける二者の対称性が浮かび上がると思われる。

おわりに

以上、「源氏物語」における男性登場人物たちの「人目」

への意識のありかたを確認した。男性登場人物は「人目」を気にする。それは登場人物が秘密にしているものを人が見る、あるいは気づくことによって、周囲に伝播される可能性を秘めているからである。「源氏物語」の登場人物は「世語り」、つまりはうわさされることを恐れており、「人目」に秘密に関する行動や出来事を見られることは、「世語り」の発端となるのである。だからこそ特に男女の関係において「人目」は気にされ、隠し事が露見しないようにふるまうのである。同じ「人目」という語であっても、登場人物によって「人目」を気にするありかたには特徴があった。

他者から見られることを気にする源氏は、「人目」を「飾る」という手段を身につけていた。しかしそうした「飾る」手段も、唯一夕霧には見破られており、そうした夕霧の見破る能力は、自身の周囲に存在する「人目」を操作する際にも利用されていく。柏木においては、古代の「見ないこと」による排除とはずらされた形で、源氏を取り巻く世界から排除されてしまう。さらに「人目」に縛られる薫と縛られない匂宮という、「人目」に対するありかたからは、二者の対称性が表れている。

このように、視線を気にする男性登場人物はそれぞれの対処法を身に付けているのである。「源氏物語」の「人目」の使われ方を確認することで、他者の視線を気にしていく登場人物たちの意識の違いが見えてくるのではないだろうか。

本稿で使用した『源氏物語』『竹取物語』の本文は、すべて『新編日本古典文学全集』（小学館）による。一における「人目」の用例数も同書による。

注

- (1) 北川久美子「『源氏物語』における「人笑へ」「名」「世語り」と「人笑へ」との関係を中心に」（『清心語文』二二〇〇一年八月）。
- (2) 石井正己 小峯和明 高木史人 高橋亨 藤井貞和「物語会議——語りと物語事典 特別企画」(『國文學 解釈と教材の研究』三五卷一号) による小峯氏の発言
- (3) 安藤徹『源氏物語と物語社会』（森話社 二〇〇八年）四四頁。
- (4) 注(3) 前掲書、三三三―三四頁。
- (5) 『角川古語大辞典』（角川書店 一九八二年 一九九九年）。
- (6) 光源氏の「人目の飾り」に関して、岩原真代氏は「女三の宮の存在の在り方を象徴」するものであると論じられている

(岩原真代「源氏物語」若菜下 卷における女三宮の琴の琴」（『國學院雜誌』一一二卷六号 二〇二〇年六月）。しかし本稿が指摘する、「飾る」という言葉には「偽る」という意味合いが強いことに関しては、言及されてはいない。

- (7) 伊藤博「野分」の後 源氏物語第二部への胎動」（『源氏物語の原点』明治書院 一九八〇年）。
- (8) 高橋亨「可能態の物語の構造 六条院物語の反世界」（『日本文学』二二卷一〇号 一九七三年十月）。
- (9) 上田満寿美「六条院世界を見つめる眼 視る人・夕霧についての考察」（『徳島文理大学研究紀要』六六号 二〇〇三年九月）。
- (10) 三谷邦明「物語文学の 視線 見ることの禁忌あるいは語りの饗宴」（『物語研究 特集・視線』新時代社 一八八八年）。
- (11) 高田祐彦「柏木物語の主題」（『源氏物語研究集成 第二巻』風間書房 一九九九年）。
- (12) 今井久代「柏木物語の方法と表現 ところとかたちと」（『国語と国文学』六八巻一―二号 一九九一年十一月）。
- (13) 三沢享子「匂宮における「すぎ」の特質」（『古典研究』一四号 一九八七年一月）。
- (中京大学大学院文学研究科博士前期課程修了生)